



子供讃歌（二）

倉橋惣三

一〇 父親の旅

1 我が子の寫眞

『何をしているの？』

『子供達にも見物させてやるのよ』

『あ、子供さん達の寫眞だね』

『そう。こうしていると、いつしよにナイガラ見物をしてることになる』

『ハ、ハ、なるほどそうだね。君らしいな』

水しぶきのかゝる瀧見臺である。前面にはナイヤガラ大瀑布の壯觀がある。同行の友人は、しきりにその雄大な絶景に見とれていたが、ふと、並んで立っている彼がポケットから何か出して、瀧の方へ向けているのを見つけて、こういう問答がはじまつたのである。

彼は外遊に出る時から、三人の子供の寫眞を持つて來た。はだみはなさずという程ではないが、名所見物とでもいう場合には、それを携行して、こんな風の具合にして獨りでいゝ氣もちになつていたのである。船の上でも、朝夕の空と波との眺めを、デツキに立つてこうして見せた。ハワイのバナナ林も見せた。ゴールドデンゲートの平和の女神の像も見せた。見せたというよりは一しよに見た。このナイヤガラは、きつと一番喜ぶだろうと思つて來たところである。幼稚園へ通つている男の子と、次の男の子と、その次の女の子と、三人がそれ／＼の表情で楽しそうに見物して

いる、と彼は思つてにこ／＼している。初めのうちはそつととしていたが、今ではもう大びらで平氣である。何も、船室やホテルの夜そつと出して見るといふようなセンチメンタルな仕業でもなければ、ホームシック的行動でもない。人前を憚ることもない譯だ。そして、此のあと彼の旅行中すつと續いた。ニューヨークの摩天樓でも、ロンドンウエストミンスターアベールでも、パリの凱旋門でも、ハーゲンベクの動物園でも、アルプスの山の上でも、ベスピヤスの遠望でも、……港外から見る神戸まで續いた。

我が子らの寫眞携帯ということは、彼の自分の思ひつきだつたが、後に、後も後も後に、あの米國教育使節團が來た際、團長スタッダード博士との話が、日本側教育委員としての資格でない個人的な會話になつた或る時、體軀巨大な博士が上着の内ポケットから愛兒らの寫眞を取り出して、スマイルしながら彼に見せたことがある。彼はあなたの國へ行つた時にわたしもといつて、互に聲を立て、笑つたが、おやばかは——英語でなんといいのか知らないが——人類共通だと思つた。

おやばかは兎に角として、旅というものはどんな楽しいものにしても、有益なことにしても、一般にいつて家庭生活に對する空白期間である。その空白は當人にも家族にも同じことだが、家郷をおもうという感じは、異境に旅している身の方に多かるう。それも、萬葉の相聞歌のような切々綿々たるものは別として、波濤萬里、我が子らと共にいないということは、親の生活として大きな空白である。せめても、寫眞親子でがまんするものゝ、耐え忍ぶのは感情で、家庭生活の空白による家庭教育の空白はどうしようもない。勿論、父親がいなくても、うまくいつてゐるに相違ないし、留守教育には留守教育としての特種な味が出るものとしても、いつしよになくては父らしい眞の存在とならない、——これは理屈でなしに、旅に出て彼の痛感した實感である。お土産を待つてゐるにしても、時折りチヨコレット位送つて貰つたとて、父は實際そばにいないのである。子供達にとつても大きな空白に違いない。——彼は、子供の研究のために、この空白を我が子らに與えてゐる譯である。

そんなこんなで、彼の子供研究が、施設における子供の生活よりも、家庭における子供の生活殊に親と子との關係の方に、より深き機微の關心を誘つたのは、學問的よりも人間的な自然であつたともいえよう。少くも、家庭を土臺とすることなしに、兒童施設を考へることはできないといふ彼の日頃の思想が、一層切實になつて來たことは、長く我が子らに留守をさせてゐる父の心としての事實であつた。我が子に與える幸福以上に何んの親の幸福があるう。親

による幸福の外何んの子の幸福があらう。

家庭研究に就て、彼の豫て期待していた、コロンビヤ大學のグードセル女史の家族及家庭論の講義、ボストンのヒリー博士の兒童調査所の事業を此の新らしい關心において一層聴きのがし見のがすことがなかつた。グードセル女史の講義にはその著書によつて與えられる以上のものがあつた。ヒリー博士の研究所では、特に家庭環境の綜合的ケースワークの實際處理について、期待以上のものを學んだ。その他、當時のアメリカの新問題の一つであつた少年審判所の實際と研究とは、少年の心理學的問題の外に社會學的家庭問題に重きをおく點において、多くの新しい考察點を教えられた。但し、それは社會問題として、當然家庭の教育機能の缺陷の方面に傾いていた。缺陷家庭の研究はアメリカにおいて、當時最も憂えられていた緊急事項であつたが、同じく我國にも持ち歸るべき必要があつた。殊に彼のような理想主義家庭教育觀の所持者には、社會現實に對する鋭い目を養われるところが多かつたのである。しかし、彼のより多く求めるものは、矢張り、家庭生活の理想的方面の實例であつた。彼は豫て本で讀んだニューイングランド・ホームとか、話に聞いた英國の上品な家庭とかの實際をくわしく知りたいのであつた。そして、その機會を失しないように心がけたのであつたが、歐米の家庭は外國人には容易に知り難い。良家庭であればある程そうである。彼は人をたよりに一端をのぞいただけで、長期の外國生活者のように、眞髓をつかみ得なかつたことは遺憾であつた。アメリカでも、イギリスでも、殊にドイツにおいて、彼はそれ／＼一應のよき家庭の客となることができたが、それは皆合憎子供のない家であつた。子供のいる家では、外國人を入れて呉れないらしい。そこで彼は、親と子供とが遊びに集る場所を漁つて、せめても局外觀察を試みることに楽しい勉強をしたものだ、だが、そんな時、我が子を思うこと愈々切である。

2 家郷の父の音計

妻からの重たい手紙だ。父の訃音である。御病中、アメリカへ決して知らせてはならぬ。心配させてはいけなからというお言葉でしたが、今は母上とも御相談の上この悲しいおたよりを書きます。この手紙をいつ御覽になることでしょうか、という書き出しでこま／＼と記してある。そうして、そのあとに、母上も子供たちも、一同丈夫ですか

ら御安心下さいと添えてある。「父母います間は遠く遊ばず」という古訓をしみる」と思う。

父は母と共に彼にとつて誠にいゝ親であつた。獨り子として、その愛を獨占させて貰つて來た幼時からの思い出が、今ひとり旅の胸に湧きあがる。

愛といつても、旗本ゆづりの父の人柄には甘いところはなかつた。といつて、江戸通人風の肌合いから、野暮な頑固親父という點は少しもなかつた。とりわけ彼に對する態度は、ものわかりのいゝことで一貫した。従つて理屈で説き聽かせられたり、理詰の小言をいわれたりしたことは一度もなかつた。權威を以て干渉された記憶は尙更ない。フランス派の法律家だつたから、人權という考えも自由の思想も學んでいたのだから、當今いう我が子の基本人權といつた觀念主義からでなく、我が子への信任感といつたものが、いつの時にも親心としての基調になつてゐた。彼は嘗て親から審判され批難され禁止され、強制された覚えがない。一中に入つた時も、一高の試験をうけた時も文科大學を選んだ時も、卒業後の就職も、この在外研究も、一切彼の心まかせて事後承認といつた具合だつた。

父はまめの人、趣味の人であつた。餘暇には花作りに凝り、木工に凝り、釣に凝り、投網に凝り、銃獵に凝り、弓に凝り、俳句に凝り、篆刻に凝りという風であつた。後には義太夫に凝り、歌澤に凝りという多趣であつた。父はいつでも何かに凝つていたし、彼の憶い出す父の姿もその何かに凝つてゐる熱中の姿である。そしてその傍にはいつも彼の小さい姿がある。父は素より自分の興味からで、強いて勧めるということはなかつたが、はだしになつて庭へついで出る彼の爲に小さい鍬などの園藝具を揃え、仕事小舎のかんな屑の中にしやがんでゐる彼の爲に、大工道具一式をととのえ、釣道具はもとより、特に小さい投網をすいて與え、小さい獵銃をさえ買ひ與えた。俳句には母と共に運座の仲間に入れ蕉風流の號をつけて印をほつてくれたりした。又やわらかい蠟石や南爪のへたに自分でも印刻できるよりにあぶなくない小刀類をも用意してくれた。義太夫と歌澤は一寸別ものだが、母も三味線を習つて父の相手をする座敷に、彼もいゝ聴き手の一人になつて坐つてゐた。萬事がこういう調子で、父は彼のためというわざとらしい意識からでなく、彼も教えられるというのではなかつた。しかし親先づ凝り子之れに導かれるというところは、新しい教育法におのづから通じていたともいえる。兎に角斯うして、彼の家庭生活は、に親と離れてゐなかつたし、いつも親と共に樂しかつた。彼は教育を教育として行わなかつた親の態度と親の共樂と信任の幸福とを感謝する。

この訃音を受けとつたのは、ニューヨークのリバーサイドの假宿であつたが、彼は毎日のようにハドソン河の夕日

を眺めながら散歩に出た。長いツワイライトは靜かに物思うによい時間である。そうして、歸つては母と妻と子供達へ繪葉書を書いた。名所の繪葉書はそのところ／＼で送つてゐるから、町で買つて來た動物繪やボンチ繪が多い。顔なじみになつた賣子の娘さんが「またお國へですか」とうつて面白いのを選んでくれるようになった。スタンドの下片假名で書く文言もふざけたことばかりで、たゞ My Dear だけは、どれにも英語で書いた。——旅に出ている父親には、この位のことしかできない。

3 美術館の手押車

ニューヨークの美術館で、彼のよく見かけたうれしい光景は、足の悪い子を手押車に乗せて、父親が後を押しながら、繪や彫刻を觀せて廻つてゐる場面だつた。美術館を訪れる毎に二組三組は見かけるのが常だつた。

その愛すべき手押車は館の入口に備えつけてある。大抵はそこまで父親が自家用自動車を運轉して來て、子供を抱きおろして、その手押車に乗りうつらせる。時には受附の館員が「ハロー」といつて手助けすることもある。そういう時、子供も必ず元氣に「ハロー」と答える。彼は父子の邪魔にならぬ程度に、少しばかりいつしよに歩いて、聞うともなく尋ねると、屢々「小兒麻痺で」という答えを聞いた。勿論その場合、問う方も「お氣の毒に」なんていう顔をしては失禮であるし、答える方も「不幸にして」なんていう氣振りもみせない。それは不具者に對する一つの作法だが、どうもアメリカには小兒麻痺が多いようだ。今ならばミスター・ルーズベルトのようにとでも一口添えるところだが、その頃の彼はそれを知らなかつた。

親が我が子に美術を觀せたがるから、こういう設備ができてゐるのか、こういう設備ができてゐるから親が我が子を連れてくるのか、そのあとさきの關係は知らないが、こゝでは足の悪い我が子を連れて美術を觀賞させる親の心の方に、彼の目は屢々涙ぐんだものだ。もう一つ嬉しいのは、そこへ同じ年位の子供が來ると、決してその手押車を追い抜いて行つたりしないことだ。

アメリカでは、不具者を大人にせよ子供にせよ輕べつしたりしない。その教育にも行き届いてゐるし、兒童達も別段悲しそうに陰氣にしていない。彼は諸所のクリップル・ハイム（畸形兒童教育所）を視察したが、びつこ、てな

し、せむし、それよりもつと畸形な子らが、嬉々として遊んでいるさまを見て、誰れにということもない感謝と感激がこみあげたりした。が、こゝでは、その子の爲に半日を費して、手押車を押しに美術館へ来る父親の心だ。出がけには、ドラック・ストアへ寄つてアイスクリームでも御馳走しておもらいなさいと、母がやさしく送り出したことだろ。兒童の藝術教育というよりも、家庭教育の話である。

その美術館では、子供のための若い婦人の説明者がいる。その説明は極めて親切に、また教育的だが、殊に此の度々来る娯樂の少ない子供と顔なじみになつていると見えて、特別にゆつくり説明してやつている。この説明者は、足の悪い子に同情していると共に、父親の心もちに、一層やさしく心を動かされているのに相違ない。

4 霧の日の子供劇場とハイドパークの綠蔭

霧の多い冬、ロンドンではいろ／＼の子供劇場が興業される。相當の大きさの中劇場で母子づれの美しい観客が、いつも満員になつてゐる。霧と直接關係がある譯ではないが、うす暗いうつとうしい日を、明るい舞臺を樂しむのは一つの要求かも知れない。出しものはありふれたお伽噺を劇化したものが多く、たとえばピーターパンとか、シンデレラとかいつた類だが、軽いミュージカルプレーに仕組んで、おどけ入りで賑かに笑わせるが、下卑ていないのは子供らといつしよに觀ていて快い。小學校中級から幼稚園位の子供が多く、服装も髪も、幼いながら英國流の品をもつて、大部分が母とならんできちんとしている。道化役が出てくると手を拍つて笑いはやすが、どこかの國の子供らのように椅子の上に立ち上つたり、わめきたてたりすることは殆んどない。やつぱり作法がしつけられていると見える。彼は、顔色のちがつたおつさんが隣席にいては觀劇中の興に邪魔になると思つて、一番後ろの列に席をとるのを例としたが、パットあかりのついた幕間にも、後ろをふりむいて見る子はいない。開幕に先立つて、みんな立ち上つて、靜かに國歌を合唱するのもしおらしい。小さい英國の紳士淑女といつた格だ。母達も勿論いつしよに起立して歌う。樂しそうだ。

彼のよくいつた子供劇場の一つに、シエクスピヤ劇を演じては小學上級生に見せているのがあつた。これは娯樂と
いうよりも少年の教養を目ざしたもので、各小學校の團體に市から電車賃まで出してやつてゐる羨ましい施設だが、

母子づれの幼年劇場よりは多少身なりも亂雑だが、行儀のいゝことには感心させられた。先生の話によると、子供らはこういうところへ来る時に、きつと頭髮に櫛を入れて、靴を磨いてくるということだつた。兎に角イギリスでは子供のしつけは社會なみのことになつてゐる。

ロンドンの春は生きかえるようだ。その中でも緑の美しく生きかえつたハイドパーク公園は幼い子の乳母車が芝生の道をうづめる。どここの家庭でも戸外の健康保育を忘れないのであろう。その廣い公園の一部に相當廣い池がある。子供らはめい／＼種々の形の玩具のヨットを持つて集つてゐる。そうして帆の張り方を工夫しては、きれいな漣の立つ水の上を走らせてゐる。海運國イギリスの子らしい遊びとしてほゝえまれるが、それよりも快いのは、皆がおとなしく、自分の持ち船を愛し、人の船を邪魔しないで楽しみあつてゐることだ。競争でどなりあつたり、石を投げつけたりするのはない。休みの日にはホームズパンの父親がついて来て、池の渚から一寸離れた芝生の上に腰をおろして、パイプをふかしながら、にこ／＼見物してゐる。そうして、小船主が帆の曲げ方に困つてゐると、のそりのそりと腰をあげて来て、黙つて手傳つてやる。そういう時にも、きつと互に黙つてゐるので、どこまでも物靜かなふんいきを漂わせるが、如何にも樂しそうである。その有様には英國人の悠ちようというだけでは足りないものがある。そうして、いつまでも根氣よく眺めてゐる外國人をあとに残して我家へ歸つてゆく。その子供達の群の中に、我が子を見出せないのがいつも彼に物足りない。

彼が好んでこんなところに行つたのが、可愛いゝ子供達を見る樂しさと共に、我が子といつしよに樂しんでゐる。いゝ母やいゝ父を見ることにあつたのはいうまでもない。

5 みやげの科學玩具と人形

アメリカでもイギリスでも、子供達に買つて歸つてやりたいものは澤山あつたが、彼の初めから豫定したみやげは、ドイツの科學玩具とフランスの子供服であつた。どうせ大したものゝ留學生に買える筈もないが、その頃ドイツは戦後のマルク相場の下落時代で、ベルリンでは、子供達の喜ぶ顔を想像しながら、あれやこれや買ひあさつた。とうとう或る店と懇意になつた位で、暇さえあれば出かけて行つては買つて歸つた。實際いゝ玩具があるのである。日

本流にいえば玩具ともいえないように精巧であり、殊に、子供が充分使つて遊べるように堅牢にできている。なかも彼の玩具研究をよるこぼせたのは、各種工業の機械を摸したものでアルコールランプで湯を湧かして、それをモーターにして、さまざまのエンヂンを廻轉させるのは、男の子らがどんなに喜ぶだろうと思つた。まゝごと道具にしても、電気仕掛で一通り料理ができる臺所セットや、小さいながら人形の着物位は縫えるおもちゃやミンヤ、彼が豫て理想玩具として考えていたものが、何んでもできてゐるのには驚いた。極く幼い女の子にはまだ使えそうもないが、持つて歸れば、そのうちに大きくなつて喜ぶだろうと思つた。それらを、目につき次第買つてゐる間に、部屋に備えつけの大箆箭の上下の引出しに一ぱいになつた。その中には、科學玩具ばかりでなく大きな人形も幾つかあつた。うちの女の子とどつちが大きいだろうと思つては、引出しに押し込めないで箆箭の上に飾つて可愛がつた。ところが、この大人形が先づ家人の目につき、抽出し一ぱいの玩具が興味をひいて、新しいのを買つて歸ると、今日は何だ何だという風になつた。そうしてゐるうちに、親類の子供達を連れてくるから見せてやつて呉れと申出された。彼はこんなものドイツの子供には珍らしくもないだろうと思つたが、『今のドイツの子供には、こんな大きな人形なんか、どこの親でも買つてやれないから』と言われて、ハツとした。敗戦國の親と子のことである。しかも、彼が部屋を借りていたのは、もと大學教授の知名の博士の未亡人の家で、その上品な老未亡人の孫や近親の子達なのだから、いづれも相當に教養の高い家庭である。その老未亡人のアパルトメントにしても、相當廣い家で、彼に使用させてくれている調度品にしても、件の大箆箭にしても、彼の東京の家では到底見られない、立派なものばかりなのである。その、故博士の書齋だつたという二室つゞきの部屋にしても、戦前なら、彼なんかに貸してもらえそうもない窓硝子の大きな美室である。その親戚の人々も住居は大體同じような家に住んでゐるのである。——敗戦といつて焦土にされないのだから——しかし、子供にいゝ玩具や大きな人形なんか、決して買つてやれない敗戦國の生計だつたのである。我が子へのみやげとはいえ、彼は頗るすまないような氣もちで、玩具を見に来る子らを迎えたことであつた。——日本のフーターだつて、自分のものばかり買うのではない、家に待つてゐる子供達のためだからゆるしてくれ。——まだ敗戦を知らなかつた日本の父と子の幸福であつた。(つゞく)